

「ほんなん」 しています。

わだいのしんなん

1626の学校

丸3年かけて廃校調査を進め、今春、『熊野の廃校』(中島敦司、湯崎真梨子共著)として発刊することができました。

明治4年、ちよんまげをやめましようという断髪令が出ると翌年、政府はフランス式の学校制度を導入しました。このあたりの日本の「変わり身の早さ」には驚きます。

学校制度は、全国津々浦々に強制され、どんな山奥でも、貧しくても、男女の区別なく子どもは学校に行くことになりました。日本の教育制度の浸

透スピードは、世界トップであったといわれるほどです。

明治初期の学校統計には、村から郡事務所へ、郡から県へ、県から国へと報告される途中に年度が変わったり、記録の誤りがあったのか、資料により数字や校地に違いがあるなど不明点が多いのです。そうした混乱も含めて学校草創期に、地方が近代化を受け入れた姿を丹念にひもといていきます。

昨日までちよんまげ、とは比喩的に語っていますが、突然降って湧いたような学校の強制化は、

熊野の廃校

熊野の廃校

中島敦司 湯崎真梨子



廃校と地域が辿った変遷史

熊野が実態に足る運び調査した学校や廃校は1626。村から人が減り、学び舎は廃校になった。だが、どんな地域でも、地域が生き延びることを保つた宝は永久に封印される。

『熊野の廃校』

お金もかかるし(当時は学費が必要で、学校建設も地域の負担だった)、重要な働き手である子どもを日中、学校に取られるため住民にはとても不評でした。しかし、子を育む場所としての学校教育が地域に認知されていきます。それには熊野では30年の時が必要でした。

和歌山県の小学校は最大で788校にもなりますが、大体400校くらいに落ち着いていきます。各学校は新築移転や統廃合により所在地を何度も変更しています。私たちはその校地変遷も過去にさかのぼり、一つひとつ探訪し場所を特定し、その数は1626にも及びました。この1626には地域が学校教育を受け入れていく過程の葛藤、工夫、共同して問題解決する知恵の抽出、などさまざま背景があり、廃墟に分け入り調査をする私たちもまた、その時代の地域の姿を追体験していきました。それは大変な作業でしたが楽しい調査でした。

トレジャーハンティング

全国では毎年約500校が廃校となり、和歌山県でも昭和30年代初めに比べ小学校は200校近くも減り、この3年間で15校が廃校になりました。文部科学省は増え続ける廃校施設の活用を進めるパンフレットを作っています。題名は「未来につながる、みんなの廃校プロジェクト」。明るい誌面で、体験交流施設や福祉施設などへの活用事例を掲載しています。廃校は、ふるさとの魅力ある宝として、地域活性化を生み出すものと期待されることが多いのです。

しかし「廃校」にノスタルジーをまよわせただから地域活性化につながる、という論説は危険です。廃校は、郷愁よりも重い地域の危機の最初の兆候、あるいは最後の結果。住民が廃止を決断した学校は、もはや地域の宝ではなく、広い空間を持つ建物物件とってしまったのです。

『熊野の廃校』では「廃校探しはトレジャーハンティング、1626の真実」として、熊野地域に残る廃校を数百枚の写真で追跡しています。トレジャーハンティングとは、廃墟の財宝探しのこと。地域の宝、とは、歴史の末端で捨てられた現在の廃校ではなく、どんな山奥にも学校を中心に暮らすが生き生きと存在していたという事実こそが宝なのです。その宝を掘り起こし、学びの道で、そこからきくと新しい道が探求できるのだから、廃校調査の中から確信しました。



観光利用に失敗した三越小学校(日本宮町)

プロフィル



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。